
魔法先生ネギま！次元を跨いだ男

派遣社員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！次元を跨いだ男

【Nコード】

N6411X

【作者名】

派遣社員

【あらすじ】

幼少時に次元の狭間に飲み込まれた男が魔導師の力を得て再び元の世界へと帰ってきた。果たしてその男はどのような行動をとるのだろうか？作者が病気を再発して書いてみる実験作その4。

・いつもどおり不定期なので、更新は余り期待しないでお待ち下さい。

プロローグ（前書き）

- ・誤字、感想等お願いします。
- ・更新は不定期です。ご注意ください。

プロローグ

とある森の中。突如として幾何学的な模様の魔法陣が発生した。

二重円の中に正四角形が二つ、更にその中に正三角形が二つ、互い違いに組合わさり、更に中には星型の法陣が紡がれている。円と円の間には今の世界には存在しないだろう複雑な文字が等間隔で並んでいる。それが眩い光りを放ったかと思うと1人の男が現れた。男は安堵の息を付くと、周囲を確認し始めたのであった。

??? Side

俺は転移に成功した後、周囲を探る為にサーチャーを放つ。……

現在地は、埼玉県麻帆帆良学園都市の郊外の森。よっしゃあ！念願の『魔法先生ネギま！』の源世界に戻ってこれたぞ。

上記を見ても解ると思うが、何を隠そう俺は転生者だ。名は衛宮アキラという。

最初、9歳の頃に次元断層に落ちた拳句、リリカルな世界の地球に来た時はもう戻れないのかと落ち込んだが、そこで仲良くなった女の子達（男の同年代か近い年代の友人は2人しか居なかったんだ）と協力して色んな事件を解決しながら、10年の月日を数えて開発していた平行世界間転移魔法が偶然が重なって出来上がった時の嬉しさと来たらひとしおだった。更に、転移可能世界のリストにこの世界が有った時は、俺がその時世話になっていた組織の、所属していた部隊の連中を巻き込んで小躍りして喜んだほどだ。とはいって

も近場の平行世界なのは分かっていたんだがな。次元断層を落ちていたのは僅か10秒ほどだし。

……え、リリカルの世界の恩人達はどうでも良いのかつて？んな訳は無い。当然アイツ等も大切な存在だ。何時になるかは分からんが招くなり、向かうなりするさ。平行世界間の通信魔法も開発出来たから何時でも話できるしな。……それに正直な所、この魔法が上層部に知られたらアイツ等が管理局に拘束されかねないから、そうなる気配がしたらこの世界に来る様に伝えてある。

それはともかく
閑話休題。

「……しかし、最初っから麻帆良とはな。侵入者扱いされるだろうが、もう今更だし。なにせ一度出直そうにも」

呟きながらバックスステップ。

一瞬前まで居た所に氷の矢が13本程突き刺さる。

「既に見つかってるしな」

氷の矢が飛んできた方を見れば、そこにいたのは二人。かたや10歳くらいの金髪の少女、もう片方は15歳くらいの緑色の髪の少女。耳につけたアクセサリー？からして人間ではないのだろう。……ぶっちゃけ、『不死の魔法使い』エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと、その従者、絡繰茶々丸である。

「ほう、今の不意打ちを避けるか。撃った瞬間には動く気配もなかったんだがな。……『無拍子』の使い手に会ったのは久しぶりだ。そこそこの暇潰しにはなるだろう」

そう言つとエヴァンジェリンは魔法薬を取り出して再び詠唱を開始する。茶々丸がブースターで突っ込んでくるので軽くあしらいながら対応を考える。

……ああ、その間に無拍子について説明しておこう。……無拍子とは、行動の一切に溜めや予備動作を必要としないようにする技術で、一度極めると使い手の動きを『読む』事がほぼ不可能になる。一切の動作が唐突に行われるのだ。防ぐには使い手よりも高次元のスピードで、攻撃されてから届く前に防ぐか、無拍子をものともしない範囲の殲滅技、または術を使うしかない。

閑話休題。

取り敢えず別に敵対したい訳ではないので俺は手早く降参する事にする。

「まあ待て。俺がここに入ったのは転移事故だ。ここに来たかったのは認めるが本当は正規の手続きをとってから来るはずだった。今日はすぐに出ていくからそう攻撃するな」

「何？……もうちょっとマシな嘘をつけんのか！？まあ、どちらにしても不法侵入してしまった事は確かだ。呪うならミスをした自分を呪うんだな」

彼女はそういうと今度は氷の矢を18本飛ばしてきたので、

「ちつ。ヴァルキュリオン、セフトアップ！！形態はダガーモードで固定！！んで、バリアジャケットは無し……！」

『了解しました、マスター』

それを避けながらデバイス『ヴァルキュリオン』を展開する。

「フアング・スラッシャー!!!GO!!!」

『フアング・スラッシャー』

黒い魔力光が収束して俺の周囲を周回する2つの旋回する十字の刃となり、対象の前の地面に向けて飛翔する。万が一少女達が魔法にぶつかっても非殺傷設定にする事で下手な怪我を負わせないようにしている。が、まあ心配する事も無く地面に激突して盛大な土煙を上げる。その瞬間に飛行魔法を展開。俺は後日改めて学園長……近衛の爺さんに再会して、記憶を覗いて貰うなりして確認して貰うため、時速300kmほどで学園都市から飛び去ったのであった。

「一つの出会いと、二つの再会。」（前書き）

この学園長は原作よりか、またはソレより幾分甘い人間です。ご注意ください。そして、出会った人間は空気です。

一つの出会いと、二つの再会。

side・アキラ

あれから3日後。

俺は学園長にアポをとってから再び麻帆良に訪れていた。一応、ヴァルキュリオン（以下ヴァル）は展開済みだ。……まあアポといつても、あの後直ぐに近場の公衆電話から学園長の私室への電話番号をハッキングし、確認してから電話して、『衛宮アキラは生きています。彼の現在の行方を伝えたいので3日後の午後1時過ぎに近衛学園長の部屋へと出向く』といつて一方的に切っただけだが。結果として、現在幾つかの警戒の視線を貰っている。捕らえようとしているのか、連中が人払いの符を発動させるが、その度にヴァルが探知して光学迷彩を付けたビットに焼かせている。ったく、高畑さん辺りに声を掛けさせれば良いだろうに。広域指導員しているんだし違和感がない。しかしそれをされるのも面倒だ。

ちなみにヴァルは懐にダガーモードになって入っている。BJは展開していない。当然だ。あんなコスプレ紛いな服装一（劇場版ナデシコのバイザーの無いアキトの格好で、その代わりにガンダムSEEDのラウル・クルーゼの仮面を黒くした物をつけている）なんかは絶対に昼間から出来ないし、そもそも戦闘時位しか付けるつもりもない。それだって出来れば極力着けたくない。俺だって恥ずかしいという感情は十二分に有るので万が一着けるとしてもそのBJをとても凄く我慢してつけるのだ。変える事？何故か呪いのような物が掛かっている様で全く出来ない。当然、変身シーンは人には見せない。当然そんなものを見たがる奴もいないと思うが。

他のフォームをとろうにも他の各フォームは総てデバイス内の時計基準での一日の内、120分とか、60分とか、酷いものになると10分とかねないと言う時間制限が存在する為、そんな理由で他のフォームを使いたくは無い。しかし、他のフォームの方の格好は、俺からすればまだマシなのだ。某機動兵器のマイスターの愛機を鎧化した物だったり、某博士の重力兵器を搭載した機体を模した鎧だったり、奪還コンビの内、電撃使いの天敵的な立ち位置の某クスクス笑いの人の服装だったり。唯一まとも言えるのが、ライオンが空想動物になっっている世界の、無口で無愛想な銃剣使いの服装。とは言っても上に挙げたような連中の技術を一部だけが使用できるので、悪い事だらけという訳でもない。

それはともかく
閑話休題。

物陰に入り、監視を含め誰も見ていない事を確認すると、以前悪戯用に適当にプログラムを組んだ変身魔法を使い、六課のメンバーの一人であるスバル・ナカジマに変身する。当然、彼女の愛機デバイスのマツハキヤリバー付きで。そしてマツハキヤリバーを機動させ、別人に成りすまして飛び出し、有る程度の速度まで一気に加速して引き離しながら監視の目を晦ます。そして悠々と近衛学園長の部屋に向かったのであった。

姿を元に戻した俺が学園長室に着くと、中から二つの気配が感じられた。一つは覚えがある。近衛の爺さんの物、もう一つの気配もそれなり以上に強い事から、恐らく高畑さんではないかと思われる。俺が学園長室前で立ち止まっていると、中から声が掛かった。

「そんな所で立っていないで入ってきたらどうだい？」

高畑さんの声は少々堅い。まあ、警戒をするのは解る。

「失礼します。……こちらが学園長室で宜しいですね」

そう言いながら滑り込むようにして中に入り込む。1年前の正月に麻帆良に行った時が最後に会った時なので11年振りである。が、あの時の好々爺振りが嘘の様な鋭い目でこちらを見ている。まあ、此処にいるのは素性不明の人間だ。無理もない。

「初めまして、『赤き翼』のタカミチ・T・高畑さん。そして、10年振りですね。お久しぶり、と言つべきでしょうか。近衛翁。私が誰か解りませんか？」

「むっ……」

どうやら分からないらしく、こちらをジッと見つめて来る。

「おかしいな。姿形は成長こそしましたが、顔は昔からそう変わらないと言われていたんですが……」

にこやかに微笑みつつ、続ける。

「ヒント1です。私はお孫さんの木ノ香とその友人の刹那と友人です……。次に……、どうやら御判り頂けた様で……」

ヒントを話しはじめると驚愕の表情を浮かべ、椅子から立ち上がってこちらまでヨロヨロと歩いてきた。そして、俺の手を掴み、語りかけてきた。

「まさか、君本人が衛宮君か!!!今迄一体どこにいたんじゃ。生き

ておって何よりじゃ」

俺はそういう爺さんと久しぶりの会話を楽しみつつ、

「お久しぶりです、近衛の爺さん。中々判ってくれないので焦ってしまいましたよ。場合によっては記憶を見せようかと言うくらいにどこにいたのかは後程、刹那も込みでお話します。木乃香にも秘匿に引っかからない範囲で。忘れられているなら仕方ないですが改めて友人になる事にします」

と言った。すると、ある程度落ち着いた爺さんが、

「実はの、既に木ノ香には魔法バレしておつてのう。トラウマになる事を恐れ、あの事故の件を記憶処置しようとしたんじやが、おぬしの事を余程忘れなくなつたんじやろうな。記憶処置を無意識領域下でレジストしたんじや。それで止むに止まれず、説明したんじや。後で木乃香に会つたら心配をかけたことを謝らねばならんぞ？」

先程も言つた通り、木乃香と刹那は俺の友人だ。幼い頃から一緒にあそんでいた。厳密に言えば兄的立場だったのだが、有り体に言えば幼馴染みと言う奴だ。が、10年前のある時、いきなり現れた次元断裂層に木乃香と刹那が落ちかけ、俺が身代わりになる様に落ちてしまったのだ。まあ、落ちた先で色々騒動に巻き込まれた訳だが。それはまた別の機会に。

「アイツ……そこまで……。そうですね。ちゃんと謝罪しますよ」

「うむ、では取り敢えず今日の寝床は後程、18時迄には連絡するからの。僕の予備の携帯を貸しておこう。それから悪いんじやが今日の22時に、迎えをやるからその者について行ってやってくれ。」

後はそうじゃの、監視の目は要らん事は全員に通達しておくから心配は要らんぞ」

確かに監視の目は要らない。何か変な事をして爺さんの信用を落とすのも嫌だし、そもそもそんなことしたくも無いしな。現在時刻は午後2時。取り敢えずいつまでも女子校エリアにいるのは外聞が大変に宜しくないので、チャツチャと移動しよう。

side out .

Side . 木乃香

授業の後、昼休みになって何時も通りせつちゃんと一緒に屋上のフェンス近くの指定場所でお弁当を広げた時の事やった。

風の悪戯か、お弁当を包んでいた袋が飛んで行ってしまったんよ。その袋は昔、幼馴染みが使っておった形見の様な物だったから慌てて手を伸ばした。けど、もう届かへんかった。

そのまま行方を追っていったら、おじいちゃんにでも用事があったのか、男の人がおって、その袋がその人の頭に落ちたんよ。男の人はそれを見た後、慌てているように周囲を見とった。そしてコツチを見たんよ。

次の瞬間、ウチは完全に硬直した。だって、所々跳ねた焦げ茶の髪に、珍しい碧の瞳は彼の特徴そのまま。そこには、あの時ウチら

のせいで黒い闇に吞まれて消えてしまった彼をそのまま大きくした
ような人が、こちらを大きく見開いた様な眼でこちらを見て立ち止
まっていたのだから。

S i d e O u t

S i d e . 刹那

このちゃんと何時も通りお弁当を食べに屋上に来た時の事だった。
このちゃんがお弁当袋を突風で飛ばしてしまい、行方を眼で追った
まま突然硬直した。

「このちゃん、どうかしたん？」

私が声を掛けた途端、このちゃんは

「アツちゃんや……」

と、声を震わせながら呟いた。アツちゃんって……、兄様！？そんな馬鹿な！あの人は10年前に闇に吞まれて消えて行った。生きているならもっと早く見つかる筈だ。そう思いながらも、私は下を覗き込んだ。

そして、絶句する。

焦げ茶の所々跳ねた髪。それは良い。そんなのは幾らでもいる。でも……、その特徴に『碧色の瞳』が付くと、そんな特徴の人は全くないと言っても過言ではない。そして重なる面影……。

気が付けば私達は全速力で一階まで降りて来ていた。そして……。本当に久しぶりに会えた兄様に二人して飛び込んでいたのだった。

一つの出会いと、二つの再会。(後書き)

誤字脱字、及び、感想、ありましたらお願い致します。

過去の説明・導入編（前書き）

誤字に気が付き、訂正しました。

過去の説明・導入編

S i d e ・アキラ

泣きながら抱きついてきた二人に謝罪をするとともに、二人からこれまで何をしてきたのかを問い詰められた俺は、取り敢えず二人に学園長から預かった予備の携帯の番号を教えた。

「久しぶりに会って嬉しいのは分かる。俺もそうだからな。でも話し出すと長くなるから、学校が終わってから改めて時間を取ろう、な。……ほら、もう昼休憩も終わらんじやないか？何人がグラウンドの方から戻ってきているぞ？時間ならこれから幾らでも取れるからな」

二人は渋々頷いて離れ、名残惜しげに校舎に歩いていくのであった。

その後俺は木乃香から電話が有るまで、マツハキヤリバーのみの部分変身をして、それなりのスピードで走りながら周囲の散策をしつつ、麻帆良の地形を頭に入れるのだった。

大体4時頃に木乃香から電話があり、俺は彼女らに学園長室で待っているように伝え誰も居ない所にて誰も通らないことを確認しつつ、転移魔法陣を敷く。電話で爺さんに今からこのかと刹那と俺が行くことを伝え、座標を合わせ、転移した。

学園長室に転移した俺が最初に受けたのは爺さんからの杖の一撃だった。

「あ痛っ」

「いきなり転移して来るとは何事じゃ。もし一般人が居たらどうするのじゃ」

確かに爺さんの言う通りだが、俺は事前に学園長室内外の気配を把握している。そのため、問題点はないのだが、俺は一言、

「爺さん、俺が悪かった」

と謝った。

「うむ。所で住む場所だが、近場に一軒家が一つだけポツンと建っている場所が有る。そこで良いかの？……いわく付き物件じゃが……」

……近衛家の傍流の衛宮家嫡男とは言え、孫同然の扱いをしている人間にいわく付き物件を貸すか？常考。

「……………。ああ、いわくの排除、または解決がその対価と言う訳ですね。了解しました。その件はそれで良いです。次に…………、どうやら来たようです。ああ、既に謝罪はあつた時にしておきましたので」

大きな音をたてて学園長室に二人が駆け込んできた。尤も、刹那は小さい声ながらも、

「失礼します」

と、言って入ってきたが。木乃香はそのまま俺の前までやってきてニコニコ眩しい笑顔を向けて来る。俺も微笑みを浮かべ、徐に木乃香の頭に手を伸ばし……。

「……あ痛っ」

その頭を軽く叩いた。爺さんも苦笑いを浮かべている。

「嬉しい気持ちは分かるが、礼儀まですっ飛ばすな。……やり直し」
「うう、……はい」

……小学生かと。木乃香ってこんなにお転婆だったか？……いや、俺の自意識過剰でなければ、こんなにはしゃいでいるのは10年振りに俺と再会出来た事が嬉しいからだろう。木乃香が学園長室から出て、改めてドアをノックする音が聞こえた。

「失礼しまーす」

爺さんが「入ってきなさい」と言うと、静かにドアが開かれ、木乃香が入室してきて、そのまま俺の所までやってきた。二度も無視された爺さん、いと憐れ。まあいいや。今度は頭を撫でてやる。木乃香は嬉しそうだ。刹那が少し淋しそうだったので、手招きする。不思議そうな顔をした刹那を引き寄せて頭を撫でる。暫くぼーっとしていたがすぐに顔を真っ赤にして下がるうとする。が、俺はそんな刹那を離さずに頭を撫でる。変な遠慮をしないで欲しいものだ。その内に諦めた様なので再び木乃香も撫でる。

「……むう……。スマンが、続きはまたにしてくれんかの。お主に
なら木乃香や刹那君を任せても良いからの。フォッフォッフォッ」

っ！いきなりそんな事言つとか何を考えているんだ！木乃香や刹那だつてこないつ消えるかもわからない奴嫌に決まつてんだろ！ほらこんなに顔を赤くして顔を蕩けさせて……あるえ？

「もう、おじいちゃんつたらあかんわあ」

「……………（真っ赤）」

何で？長い事連絡しない、又は取れない人間をずっと好きでいる事は出来ないだろ、常考。確かに幼い頃に木乃香、刹那をお嫁さんにする的な約束を当人達二人と結んだが、この場合、そもそも二人とということ自体が　　？！#&？　　……………。

10分後。失礼、取り乱しました。取り敢えず、木乃香に問い掛ける。

「……………、木乃香。仮にそうなたとして、二人と結婚は出来ないぞ？」

「うちが本妻でせつちゃんが愛妾や」

即答……………だ……………と……………。ならばこの切り札でどうだ。

「……………。俺があの日飛ばされた場所で複数人の人間に木乃香や刹那と同様、同レベルの意味での好意を抱かれていたとして、俺がそれを受け入れた後だとしたら……………？」

「え、そうなん？うーん、……………一回その人達のお話聴いてみないと何とも言えへんなあ。良い人達やつたら共有してもらえば良いと思うんよ。悪い人ならそもそもアツちゃんが放つて置くやろうから心配要らへん」

……………木乃香、好意を受けている当人が言うのも何だが、独占した

いという思いはないのか？

「あらへんよ。最低でもせつちゃんと一緒や。それに別の考え方したらええ。アツちゃんとせつちゃんをうちが一人占めや」

そういつて俺と刹那の腕をとる木乃香。というか思考を読むな、そんなアツサリと。

「おーい、帰ってこんかー」

……はっ。爺さんの呼び声によって、現状を思い出した。俺達は三人揃って爺さんに頭を下げる。そして、ようやくと本題に入る。

「さて、今まで何をしていたかなんですが、結論から言うと平行世界で暮らしていました。この麻帆良学園都市と言う地が存在しない代わりに海鳴市と言う海辺の綺麗な外観の街が存在する地球。まあ、所謂『並行世界』って奴ですね」

爺さんの目が大きく開かれる。

「その海鳴市にある翠屋と言う喫茶店の末娘で、当時9歳だった高町なのはちゃんが魔法関係に諸に首を突っ込んでしまいその挙句、自分自身も凄まじい才能を開花させ、色々な事件に巻き込まれていく訳ですが、その最初の事件のでかい犠牲者が俺だった訳です」
「ふむ、どうということか？」

爺さんの疑問が口から飛び出した。その眼は険しい。それを利用して木乃香や刹那を攫おうとしたとも思ったのか。

「ああ、別に彼女がわざと次元断層を作り出した訳じゃないですよ。

敵対魔導師との魔力のぶつかり合いの結果、ジュエルシードと呼ばれる願望器の魔力が暴走し、極短時間だけ虚数空間が開いてしまった。そこにタイミング悪く、『この世界群の情報』がぶつかってしまった。本来なら有り得ない偶然が同時に発生し、極東一の魔力持ちと全世界一の魔力持ちの俺達がいいた所に虚数空間の入り口が発生してしまった訳です」

俺は自分が悪いとでも言いたげな木乃香の頭を撫でて『そんな事は無い』と言外に主張する。今回の件は事故なのである。誰が何と言おうとも。そもそもそうして被害を受けた当人が良いと言っているのだから、納得して貰いたいモノである。

「彼女達からすれば急に目の前に亀裂が走ったと思っただら中から見知らぬ男の子が出て来たのだからその後は戦闘どころじゃありませんでした。その場は一時停戦、敵対魔導師……フェイト・テストロツサちゃんは撤退しました。そしてジュエルシードも俺が出て来た虚数空間に消えていってしまいました。下手をすればこちらの世界に飛ばされているかもしれません、それについては後で改めて……俺が個人的に捜査します。向こうの世界の魔法じゃないとあれを封印する事は出来ませんし。こっちの世界の魔法、何故かジュエルシード相手だと効果を発揮出来ないんです。というより無効化されます。何度か俺の『魔法の射手』で実験しましたから間違い有りません」

俺の断言に冷や汗をかく3人。それはそうだろう。何せ、それはつまりジュエルシードを現状でどうにか出来る奴は俺だけと言っているのだから。

「まあ、そんな訳で俺は高町なのはちゃんに保護され、高町一家に引き取られる事になりました。その際に魔法バレが家族全体に広が

ってしまいましたけれど、あの街じゃ昔から不思議な事には困らなかつたそうで、俺の事も魔法の事も全員簡単に受け入れていました。これは蛇足ですが、なのはちゃんを戦闘の危険性がある世界に巻き込んでしまったユーノ・スクライア君はなのはちゃんともども高町夫妻及び、御長男の恭也さんにお説教されていましたが。今後の関わりも辞めるように言っていました。なのはちゃんの熱意に絆されたのか、それらの戦闘の際には『永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術』という戦闘技能のある士朗さん、恭也さん、美由希さんのうち、二人以上が保護者として前線に出る事を条件に許可されました。そんな話し合いの最中に俺が目を覚ました訳です」

俺はここで一旦言葉を切った。それを確認した爺さんが確認をする。

「つまり、完全な事故でアキラは別の並行世界へと飛ばされてしまったという訳じゃな？ふむ、あの時、魔法世界を含めたありとあらゆるコネを使っても全く足取りがつかめなかったのにはそんな理由があったのか。ようやく理解出来たわい。ならば僕の訊きたい事は終わったの。アキラはその後10年をかけてここに帰ってくるための力を得たのじゃろう。後の色々な話は二人にすると良いじゃろう。ジユエルシード云々は後程報告書に纏められるかの？」

「ええ、大丈夫です。もうすでに用意を済ませておりますので。こちらです」

俺はそういうと報告書を2つ準備して手渡す。

「ホッ！？仕事が早いの。では後程読ませて貰おう。で、もう一つは何かの？」

「はい。お世話になった人達、そして教え子の、姿形、名前、及び教えた内容の細かい所です。性格等も載せていますのでもし彼女達

を名乗る者が俺に会いたいと言って現れたら確認の上、俺に教えて欲しいのです。時空管理局の所属か、フリーになっているのかは判りかねますが。それともう一つ。彼女達以外が時空管理局を名乗って現れた場合、記憶を覗いて頂いて結構です。その上で俺に連絡を下さるかどうかを決めて頂きたいのです。時空管理局に罪を擦り付けられて来る事も十分考えられます。くれぐれもお願ひします。彼女達が誰一人でも欠けていれば俺はこの世界に戻ってくる事は出来なかつたんです。宜しくお願ひしますね」

「うむ、あいわかった。必ずアキラに連絡して、丁重に持て成そう」

俺は頭を下げると木乃香、刹那を伴い、学園長室を後にするのだった。

過去の説明・導入編（後書き）

あれ？何故か刹那のセリフが出てこない。ORZ

新居はロストロギア？（前書き）

誤字脱字感想ありましたらどうぞ宜しくお願いします。

新居はロストロギア？

学園長室から出た俺達は、取り敢えずいわく付きの物件とやらに向かった。

現場に到着する。その物件は2階建ての立派な西洋屋敷で、あちらこちらに立派な調度品が並んでいた。俺は出掛けに貰った書類に眼を通す。何でも2年前に急に現場に現れた屋敷で、中からアンデットが現れたので魔法関係の者達が急いで認識障害を使用して近くに寄せないようにしたらしい。最初は何度も魔法使い達が駆逐していたらしいが、余りのきりのなさど何故か中に入ろうとしても入れないという事実から封印をしてみましたらしい。何故燃やしたりしなかったのか。そう思いながら読み続けると理由がその先に書かれていた。何でも屋敷には一切害することが出来ないらしい。燃やす事は勿論、壁や内装、調度品に至るまで総てに傷すら付かないそうだ。

その周辺には異様な空気が立ち込めていたが、気にしない。大体こんな物だ、一々気にしていたら精神を病んでしまう。俺は徐に呪符を10枚程懐から取り出し、片手で符に『気』を込め、龍をイメージしながら無造作に解き放った。『気』を込めた炎属性の呪符2枚が合さり輝いて、炎で出来た龍となり屋敷に向かって突入を掛けた。そしてその間に二人の足元に魔法陣を構築し結界を張る。

「うち等もお手伝いくらい出来るえ？」

「兄様、私達にも手伝わせてください！！」

二人が文句を言うが俺は手で制する。

「まあまあ、二人とも。ここは俺一人でやらせてくれよ。ヴァル、セットアップ。モードはガンブレード、BJは要らない」

『了解、起動します』

デバイスをセットアップし両手剣を構える。

すると屋敷の中からゾンビが何体も出てきた。しかし、このゾンビアンデット特有の『気』でかろうじて解るのだが普通の人間にしか見えない。何より、動きが早い。普通の人よりスピードがかなり上だ。

因みにこいつらと同じものを俺は前世で知っている。とあるゲームで登場した存在。

腐人。くち

ほぼ生前そのままの状態を保ち続ける為、質が悪い。やつの弱点は心臓そのものとも言える腐人作成の符。符の場所が判らなければ焼き尽くすのも良い。奴等は50体ほど現れ、俺たちの前に立ち塞がる。

俺は符を仕舞い、ガンブレードを正眼に構えた。

「カートリッジ、ロード」

『了解』

カートリッジの排出音とともに魔力が一時的に増大し、足元に俺特製の新型魔法陣が現れる。そしてガンブレードの青く輝く刀身が紅く輝き始め、炎に包まれる。そのまま腐人に無造作に近寄り、瞬

動に入る。そして腐人の集団のただ中に現れ、360度に回転しながら一閃。何も起きない。それを嘲笑うかの如く腐人達は一気に俺に躍りかかる。

「紫電一閃・廻……。モードリリース」
『リリース』

俺はそれに構わず、ヴァルを待機状態に戻してから木乃香達に向かって無防備に歩き始めた。そして俺に触れるか触れないかというところで、次の瞬間、腐人達の身体を紅い線が横一文字に駆け抜け、彼らの体は例外なく上下真つ二つになり、直後、灰すら残さず焼滅した。

初めて瞬動を使用してから15年。様々なパターンを想定し、『瞬動』とその上位派生版である『虚空瞬動』を組み合わせ、色々な軌道を描く事が出来る様になった。既にその『入り』と『抜き』は知覚できる人間は殆どいないと勝手に思っている。実際、今まで完全に眼で捉えられて対応されたのは戦闘機人No.3トーレ位だ。因みに6課部隊長を除く隊長陣には何かしらの方法で対応されている事を追記しておく。

それはともかく
閑話休題。

そのまま木乃香と刹那に近づくと感嘆している刹那に声をかけられた。

「あの『瞬動』……。兄様、あの時よりも遥かにお強くなられたんですね……。それに、今のは異世界の魔法ですよね！？ああつ、ただでさえ、当時の長様位しか訓練のお相手が出来なかったと言うのに。今全力の訓練が出来る人っているんですか？……。それに比べて

私は……………」

「……………せつちゃん、あーちゃんと比べたらあかんってお父様言ったで。あーちゃんはバグだからって」

……………詠春様、当時の俺がバグなら、ラカンやナギは一体……………。まあそれはともかく、早い内に御連絡を差し上げないといかんなあ。

……………母上にも。全くもって気が重い。……………10年かあ。まあ、色々気になる奴もいる。主に、周りが詠春様の反対派ばかりで、両親が戦争で死んでから、そいつらから教育という名の洗脳を施されそうになっていたのを俺が食い止めていた7つ上の術師専攻の少女。天ヶ崎 千草と言うのだが。……………原作通りになつてないといいんだがなあ。……………難しいよな……………。

それはともかく
閑話休題。

その後俺達は屋敷の中で腐人どもを符やガンブレードで焼き払いつつ、残敵を掃討した。そして一番奥の部屋に宿っていた残留思念を木乃香が『鎮魂の儀』を持って鎮めた事で俺の新居が出来た。因みに、その時の木乃香の『舞』はとても綺麗だったと言わせて貰おう。

その後の話し合いで何故か木乃香と刹那の部屋も敷設する事になったが、あり得ない位の部屋数が有ったから別に構わないのだが。それにしても不思議な屋敷だ。外観と中の部屋数が全く合わない。と言うより、敷地と外観と部屋数が全く違う。中から見るとまるで巨大な城なのだが、外側から見ると普通の洋館なのだ。報告書の部屋数は10部屋程度なのだが、実際の数は50や60ありそうだ。

はっ、まさかこれが管理局が第一級搜索ロストロギア・次元の館か？

何でも館自体に意思があり、持ち主と決められた者のみの意思に従いその館の広さを決めてくれる。そしてその倉庫には様々な古代遺失物や宝具、またはその贋作が並んでいるという。更に館に数ある扉の中には、古今東西ありとあらゆる並行世界、次元世界の何処にでも繋げてくれる転移門まで存在するとか。因みに管理局は主に2番目と3番目の能力を危険視及び、確保理由としている。転移門を使いたいという魂胆が見え見えだ。

どうやら追い出されないとところを見るに俺達の何れかが所有権を持っているようだ。と、思っていると何処からともなく声が聞こえてきた。

『私は皇魔館。絶大なる魔力を持ちし男よ。まずは汝を試した事を詫びます。その上で汝には私のマスターになって頂きたいのです。返答は如何に？』

刹那はすぐに木乃香を守る位置についている。この辺りの反応の良さは流石だ。とは言っても害をなすつもりはないのだろう。俺は皇魔館を名乗る声に返事を返した。

「別に構わんが、一つ聞きたい。何故俺なんだ？」

『貴方には私の力を十全に使用できる魔力があります。それに、貴方の魂は昔、私を使っていた方々そのものなのです。無論、記憶を追って欲しいなどとは申しません。あの方々は人外の存在。振る舞いの真似さえ難しいでしょう。ただ、貴方を通してあの方々を見ていることは否定しませんが、貴方を全く見ていない訳ではない事だけは信じて頂きたいと思います』

俺は頭を掻きながらいう。……素直な奴だな。

「まあ、大切な奴等だったんだろう？　だったら何も文句なんか言わないさ。それより、俺が認めた奴等は皇魔館に入れてくれると言う解釈をしてもいいんだな？」

『EXACTLY』

まあ、俺以外立ち入り厳禁何て言われたら困るしな。特に問題はないようなので良いのだろう。

「ああ、そうそう。この件について一つだけ確認しておきたいんだが。……腐人の材料は此処の人間では……」

『御安心ください。此処の者達には一切怪我等はさせておりません。……ただ、アンデッドがトラウマになられてしまった少女が一人だけいらっしやいました』

……大丈夫かなその娘。後で家に招いてお詫びの茶会でも開くか。そう思っていると、テラスにお茶会の為の大き目のテーブルと椅子が現れた。そして向かいとその隣の部屋に何やら大きな落下音がした。因みに、向かいが木乃香の部屋、その隣が刹那の部屋である。慌てて行ってみるとそこには立派なソファとベッド、タンスやクローゼット、小さめのテーブルと椅子が3つ、その上にはノート式の端末。更に大きめの鏡台に各種化粧品や小物類、アクセサリー系統の物が色々並んでいた。隣の部屋も同様だ。更にはキッチンやバスルームも完備されている。……さっき見た時にはキッチンやバスルームは無かった筈だ。俺が半分呆れていると声が届いた。

『私の力の一端です。なお、清掃等は要りません。常に不要なゴミ・埃・害虫その他健康にお過ごし頂く為に不要なモノは排除しております。とは申しましても、病原菌やウイルス、不要なゴミ・埃・汚れ・物品についた垢・害虫等は排除しますが、それ以外は部屋主の

『いる』『いらぬ』の意思にリンクされております。因みに和洋中あらゆる服類はクローゼットの中にあります。タンスの中にはそれ以外の衣類が入っております。そして化粧品はご自由にお使いください。こちらは『部屋持ち』の方全員へのサービスです。残りの小物・アクセサリは、マスターが連れてきた最初の『部屋持ち』の方にプレゼントとしてさしあげます。どうか、末永くご利用ください』

その後、木乃香や刹那に一旦部屋の整理をし始めるように言い渡し、その後、午後7：00頃に寮に帰したのであった。因みに寮監は『裏』の人間な為、特に問題はなかったそうだ。

新居はロストロギア？（後書き）

過去の説明をする筈がどうしてこうなった……ORZ

思うようにいかないものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6411x/>

魔法先生ネギま！次元を跨いだ男

2011年10月28日08時18分発行